

瘢痕拘縮の手術について

- 瘢痕拘縮とは、創傷治癒過程において、何らかの刺激により過度の収縮が起こった状態をいい、外見的には「赤く盛り上がって、ひきつれた状態」のことをいいます。
- 手術は入院が必要となることがあります。
- 手術により、つっぱり感や傷跡を軽減することができます。
Z形成術やW形成術を用いて、瘢痕の一部をしわの方向に一致させ、目立たなくさせることもあります(詳しい説明は、診察時に行います)。
- 手術後約7～10日目で糸を抜きます(抜糸)。
- 創部は糸を抜くまでは水に濡らさないで下さい。
- 手術後約3日間化膿止めの薬(抗生物質)を点滴・内服投与します。
- 手術後、定期通院が必要となります。
- 傷跡は線状に残り、完全には消えません。
- 場合により再手術等が必要になることもあります。
- 抜糸後約3ヶ月のテープ固定と約3～6ヶ月の紫外線予防をすることで、より傷跡を目立たなくすることができます。
- その他ご質問がありましたら、医師又は看護師にお尋ね下さい。

